

2023年度③

# 小論文

(全 14 ページ)

## 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙・下書き用紙は、この冊子の中に折り込んであります。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 解答は指定された範囲に記載すること。「書き終わり」をこえて記載した場合は、採点をしないことがあります。
5. 試験終了後、問題冊子・下書き用紙は持ち帰りなさい。

## 小論文③

課題文を読んで、以下の設問に解答しなさい。

平成の終わり頃から令和にかけて、当時の安倍総理大臣が国会で追及される姿がよく見受けられた。大阪で小学校を作り、オープンしようとしていた森友学園の籠池理事長夫妻に「違法な便宜を図っていたのでは」という疑惑と、愛媛県に獣医学系大学を新設しようとしていた岡山理科大学の加計理事長から、「認可をよろしくと頼まれたのではないか」とする疑惑についてであった。世間では、森友、加計両氏の名前をもじって、「モリカケ」問題というおいしそうな名称で呼んでいたので、覚えておられる方は少なくないだろう。

野党の質問者たちは、こぞって「便宜を図っていないなら証明せよ」とか、「ゴルフ場で話が出たに決まっている、違うなら証明せよ」などと迫っていた。このように「やっていないこと」を証明するのは難しく、確固たるアリバイのあるケースなどを例外として、証明など不可能とも言われてきた。

この種の追及に対し、安倍首相が使った返答に次のような文言があった。「やっていないということを証明するのは、俗に『悪魔の証明』と呼ばれるわけでして……」と。つまり何かをやったという証明（ポジティブ・プルーフ）は、証拠や証言を吟味する方法論が確立されており、世間一般で実際に行われているが、「何かをやっていない」という証明（ネガティブ・プルーフ）は、かなりの困難を伴うか、事実上不可能だ」という意味だ。

なかったことを証明するのは、あったことを証明するより一段と難しいことである。悪魔の証明と呼ばれるゆえんであるが、しかし状況によっては不可能ではない。具体的な話は、例を挙げながら進めることになろうが、なかったことの証明は「統計学上の蓋然性の世界」が中心となることをまず知っておいてほしい。

あったことの証明（刑事裁判）は、100 %のレベルと説明したが、実を言えばそれらと「100 %に達しないケースもある」ことは認めざるをえない。アメリカでは陪審員が全員一致したことをもって、100 %か0 %かを定義・決定しているものとみなしているのであるが、最後まで反対・疑問を呈した1人が、しぶしぶ残り11人に同意した可能性もある。これと蓋然性の世界の話だと言えば、そのとおりであろう。映画ファンなら、ヘンリー・フォンダ主演のある場面を思い出すかもしれない。刑事審

判における 100 % は、つまり、厳密な数学的・自然科学的な意味の 100 % ではなく、「一般常識的な意味あいにおける 100 %」であることになる。

社会科学の分野では、統計学的に因果関係や相関関係を認めるには、「95 % の確信」があれば足りる。たとえば、「××地区の子どもの IQ が高い」という事象を証明——社会科学的に証明——するにあたって、「データ分析の結果、そのような偏り（地域差）が偶然で起こる確率が 5 % 以下（20 回に 1 回程度以下）なら、それは（ほぼ）事実とみなしてよろしい」というルールなのである。これを悪魔の証明に援用するとすれば、なかつたことを証明する側はすでに大きなハンディを背負っているのであり、それがゆえに「大まかに証明できればなかったと認めましょう」ということである。これは挙証責任というより説明責任に重点が移っているのかもしれない。

20 回に 1 回というのは、かなりの確率で起こる。じゃんけんで（引き分けなしに）3 回連続で勝つのは 27 回に 1 回であるから、それよりは頻繁に起こるわけである。じゃんけんで 10 回連続勝ってもそれは偶然かもしれない。哲学者カール・ポパーは、「どんな理論も反証ひとつでくつがえされるまでの真実にすぎない可能性を秘めている」との趣旨の主張をしているが、どんな事実（らしきもの）も我々が 100 % の真実と信じているだけのことかもしれない。

犯罪も社会事象である以上、「彼がやったことは間違いない」と言う時、そこにはある程度の誤差は許容されている可能性がある。誤解を恐れずに言えば、95 % 以上の有意性を持つ事象は、社会科学において「証明された／証明されかけた」ものと考えてよいわけである。なかつたことを証明するプロセスは、「一定の蓋然性の世界」の話であることをもう一度強調しておく。

なかつたことを証明する要素は大きく分けて 3 つある。「不可能性」、「非合理性」、「間接補強証拠・要因」であるが、これらを「抗弁の三要素」と呼んでおく。最初の不可能性は 100 % の証明（挙証）が可能な要素であるが、後の 2 つは補強証拠（説明レベル）に過ぎない。補強証拠とて複数で有力なものの場合、100 % に近いレベルに達することがありうると考えられる。思い出してほしい。特に個人間の論争ではどちらがジャッジを納得させられるかが争われていた。

たとえば犯罪が行われた時間に、現場に到達できない場所にいたことが証明できるなら、なかつたこと（やってない）を証明できる。「不在証明」とも、「アリバイがある」とも表現するが、不可能性証明のひとつである。

ミステリー小説では、アリバイがあるように見えて、実はトリックの一種だったと

いうものがある。謎を解く探偵は、アリバイがあるかのような犯人のトリックを見破ったりするのであるが、これらはフィクション小説の中だけの話と考えてさしつかえない。現実社会では、アリバイのある人間は 100 % やっていない証明ができた人間として容疑から外れる。

たまに「一緒に飲んでいた人の証言」などによるアリバイもある。証言者が 1 人で、その 1 人が親しい友人のケースは少々アヤシイ。複数の信頼できる人間の証言は、アリバイとしてレベルの高いものとされるが、それでも 100 % か否かは決められない。

アリバイなどに代表される不可能性とは、文字どおり「特定人にはその犯罪を犯すことは無理だ」と判断されるケースである。アリバイ以外にも、特定犯行を不可能と決定できる要因は、いくつもある。

かつて、ある人が苦しんで死亡したあと、ひとりの高齢女性が自首してきたことがある。「私があの人を呪い殺した」と主張したのだ。聞いてみると 3 日ほど前の夜、五寸釘からで藁人形を打ちつける「丑うしの刻參り」をしたのだと言う。そしてあの人を殺したのだと。

ここでは行為と結果の間の因果関係がなく、「その手段によって人を殺すことは物理的に不可能」と判断され、無罪となった（というより事件そのものがなかったものとされた）。むろんこの女性は不満であったろうが、無理なものは無理。この種の超自然的手段やオカルトによる方法は、手段（How）に因果がなく不可能性の根拠になる。

物理的、時間的に不可能とは言えないにしても、もし本当にこの者がその行為を行ったとするなら、(かなり)「合理性に欠ける」ケースがある。そのケースは、動機——つまり非合理的行動をとった理由——が説明されなければ、ポジティブ・ブルーフの側は苦しい状況となる。先ほど、動機は説明責任の部分であり、場合によっては起訴状における重要性に欠けるケースがあると述べたが、ある非合理的な行動に対しては、動機がきちんと説明される必要がある。でなければ、あったことの証明としては——たとえば起訴状に書かれる内容説明としては——不十分と考えてよい。逆に言えば、納得いく動機が示されない非合理的行動は、「なかつたこと」の補強材料になりうるという意味だ。

例としてモーセがユダヤ民族を率いて、エジプトを脱出したという旧約聖書の話（「エクソダス」）を考えよう。（あったと仮定して）エクソダスは紀元前 14~13 世紀頃にあった、と考える研究者がマジョリティであるが、聖書の記述のとおりだったかどうかはよくわかっていない。一応そのようなことがあったものとして話を進めよう。

エクソダスのコースは、大きく分けて2種類提唱されている。北の短いルートと、南の長いルートである。聖書の記述どおり、「紅海を（水を2つに分けたあと）渡り、シナイ山で十戒の板を受けとった」とするなら、必然的に南のルートを取らざるをえない。

このルートは大人数を引率して移動するには、少々どころか、大いに非合理的なコースであることは、地図でみればすぐにわかる。カナンの地をめざし、神にそのように指示されたからと言って、モーセのコース選択に、他のリーダーたち（ヨシュアやアロンやその他小集団リーダー）が疑問を呈さないわけがない。文句を言わないわけがない。常識で考えて従うわけがないのである。

結局モーセら一行は、何十年もシナイ半島のそこかしこをウロウロする。北のルート説に立つ研究者らが、南のルートではなかったと考える一番の理由は、あまりに非合理的でまともな動機がない点である。「神が（我々のわからない理由で）そう命じただのだ」と主張したとしても、全員が従った理由を説明できていない。「神が神秘的な力で残りの人々がついていくよう誘導したのだ」と反論すると、今度は多くのユダヤ人が神の禁じた偶像（別の神を表す金の子牛）を作って拝んでいた記述（モーセは怒って石板をたたきつける）を説明できなくなる。少なくとも「南のルートはなかった」と考える主張において、強力な補強証拠となるのが非合理性なのである。

不可能性や非合理性のように、非難された内容の蓋然性を問題にするのではなく、相手側の義務の遂行が十分でないことを指摘することがある。その結果として反論する側の立場を強くする——つまり結果としてネガティブ・ブルーフの蓋然性を上げる——のが間接補強証拠・要因である。間接といえど、その強さによっては「拳証責任のトランスファー」という（次項目で説明する）抗弁に有利な現象を引き起こすことができる。

たとえば相手が「公開討論を（たいした理由もなく）受けなかった」ケースを考えてみよう。非難された側から有力な反論が出され、非難した側がそれに対応しなかったがために、公開討論の申し出があったとする。むろん受けるのが礼儀であり、義務でもあるはずであるが、「言いっぱなし」で反論を物理的に封じようとする者もいる。このように反論を公にする手段をムリに封じようとした時、拳証責任は最初に非難した側に移る。本当は移るというより、もともと拳証責任のある側が、十分な証拠を提示できていなかっただけのことだと考えることができる。

不十分な証拠で相手を非難し、反論に対し無視したりするのは、国と国との関係に

おいて起こることが多い。特定のメディアにもよく見られる。

非難された側が、可能な限りのリソースと手段を駆使して、なかつたことをなかつたと言うことができたと仮定する。何とか 20 人のうち 19 人くらいを納得させるレベルの反論（ここでは「有力な反論」と呼んでおく）にこぎつけたとしよう。その有力な反論がなされた時、「拳証責任は当初非難した側に移行する」というのが暗黙の——少なくとも人間としてあるべき——了解事項であると考える。少なくとも学問の（事実確認の）現場における論争ではそうである。この拳証責任が非難の出発点に戻ることを「拳証責任のトランスファー」と呼ぶ。

なかつたことを証明する、もしくはそれに近づける要素のうち、「不可能性」が反論として有効と認められたケースは、拳証責任のトランスファーは即座に発生する。個人 vs. 個人の争いにおいては、たとえ 100 % の不可能性でなくとも 95 % くらいの不可能性が示される程度でも最低「説明責任」レベルのレスポンスの責任が成立する。ポジティブ・プルーフ側は、その抗弁に対する「新たな反反論（あるいは再非難）」——つまり非難の根拠のより強い提示や、抗弁の穴の指摘・追及——をする義務がある。それができないなら、当初の非難を謝罪するしかない。ただし世の中には、それほど潔い人間ばかりいるとは限らず、抗弁に対し有力な反反論もないのに無視を続ける者も少なくない。

「不可能性」を除く 2 つのネガティブ・プルーフの要素、「非合理性」と「間接補強証拠・要因」は、「不可能性」ほどのパワーはないにしても、それに近いものがある。逆にかなり弱い根拠のものもある。根拠（パワー）の弱いものであろうと、いくつか合わせると「合わせ技一本」のような状況が認められる抗弁（有効な反論）となりうる。たとえば信用度 70 % 程度の抗弁であっても、別個独立して 3 種類あれば、ポジティブ・プルーフ側のパワーは  $2.7\% (=0.3 \times 0.3 \times 0.3)$  まで落ちる。つまり抗弁は 97 % 以上のパワーで成功している計算となるため、ポジティブ・プルーフ側は、それらの抗弁に対しコメントを出すことが求められる。すでに拳証責任のトランスファーが（かたぎの世界なら）起こっている状況だと考えられるからである。

ひとつの抗弁のパワーを 70 % などと決めるることは、机上の論理にすぎないことは認めよう。ここでは「ある程度うなづける反論がいくつか存在する時には、答える義務が生まれる」ことを強調したいのである。

旧約聖書の創世記に、有名な「ノアの方舟」の話がある。聖書の記述にあることはすべて真実だと考える人々——「ファンダメンタリスト」たち——は、ノアの物語は

本当に起こったことだと主張する。

ユダヤ教の神、ヤハウェは人間どもの堕落に怒り、ある時人類を滅ぼして、もう一度リセットすることを決意した。ただし神の命令を守る心正しきノアと、その家族は助けることに決め、ヤハウェはノアに言う、「これから大洪水を起こして、地上の生き物すべてを滅ぼすつもりだ。ノアよ、お前は方舟をつくり、地上の生き物をひとつがいはずつ乗せなさい」と。

40日間の大雨で洪水が起り、水が引く150日後まで、世の中は完全に水没する。あれやこれやで船はアララト山の頂上近くに着き、ノアの息子たちとその嫁たちは人類の祖先になる、という物語である。つがいの動物たちが7匹ずつという記述もあるが、一応少ない方のつがい（2匹ずつ）と仮定しておこう。聖書によると、それぞれの動物の1年分の食料も積んだそうだ。

こんな話を真剣に取り上げるのは気がひける（プライドも傷つく）が、次のいくつかの点を考えるだけで、この話が物理的に不可能であることが明らかとなる（以下は聖書の記述をもとにする）。

◎方舟は長さ300アンマ（約135メートル）、幅50アンマ（約22.5メートル）の3階建て。つまりフロア面積9115.5平方メートルである。小動物に必要なスペースをエサも含めて（少なめに）ひとつがい10平方メートルとしても、900つがいくらいでいっぱいになる。むろん小動物に限定しても、世に存在する動物種はこれよりはるかに多い（万の単位だろう）。しかるにもっと場所をとる中型動物や、大型動物（ゾウやキリン）をエサも含めて乗せることは、ラクダが針の穴を通る比喩など簡単に思えるほどの不可能レベルである。

◎地球を水没させる量の水は、地球はおろか太陽系全体のH<sub>2</sub>Oでも作れない（と、アイザック・アシモフが科学エッセイで述べていた）。

◎聖書の記述では、アダムとイブからノアまでは10代ほど。ノアからアブラハムまでさらに10代。アブラハムからイエスまで42代と記述されている（参考：「マタイによる福音書」）ため、計62代ということだ。聖職者の計算でも、神が天地創造をしたのは、紀元前4000年頃であるから、ノアはせいぜい今から5000年前より新しい人間である。たとえばエジプトでは、その間途絶えることなく人口が何百万人もいたことがすでに知られており、ノアの次男のハム1人からエジプト人がスタートするという聖書の記述とは矛盾している。

なんか、まじめに矛盾点を考えるのがバカらしくなってきたので、（まだまだあるが）

このへんでやめておく。それにしても、この話を真実だと信じている人のなんと多いことか。現在の海洋地理学は、過去の洪水や津波の跡を確定（もしくは否定）することができる。小規模な川の氾濫程度はあった形跡は確かに存在するが、ノアが住んでいたウルからアララト山まで、船を800キロも流す洪水があったはずがない。こうして、ノアの大洪水は物理的に「なかった」と決定づけられるのである。それは「物理的に不可能」という簡単な理由による。

本来なら「あった」と主張する側が、一定の証拠を提示するべきことで、「なかった」側は何もしなくともよい。たとえばアララト山に残る方舟の木切れを示し、炭素同位体による計測で年代を特定する。あるいは地層に残る洪水の跡を示す、などなど、あつたことを証明する手段はいくつかありうる。しかし、そんなことをしなくてもこのケースは、なかったと考える側に、証明できるレベルの証拠が揃っている。藁人形で人を殺すより、もっと物理的に不可能なのである。

洪水伝説は世界各地に残る。それらの伝説は、ノアの洪水物語が書かれたはずの紀元前7～5世紀頃（あるいは、ダビデ王の頃[BC11世紀]）より、タップリ2000年は遡るものもある。インドやギリシアにも類似の伝承が残る。アッシリアの粘土板に残る『ギルガメッシュ叙事詩』やパレスチナで出土した「アトラハーシスの物語」には、ノアの物語に酷似する話——たとえば鳩を放ってオリーブの枝をくわえて戻ってくる点まで同じ話——が書かれている。どうひいき目に見てもノアの物語の方が新しい。

読者の中には不満に思う人がいるだろう。世の中には科学で説明できない事象がいくつもある（と聞いた）のに、なぜ科学の説明だけが優先されるのかと。「神がそのように決め、そのようにしたのだ」という考え方だって成り立つはずだという主張に対し、決定的な反論などありえない。どれほど合理的に説明しようと、「それは神が決めたのだ」、「神ならできるのだ」と返ってくるだけであるからだ。その種の主張の一番の欠点は、「妥当性と再現性の欠如」であろう。妥当性と再現性については後に解説することになるが、要するに「バカバカしい」のである。

「神話(myth)」は、文字どおり神の話(物語)で、言わば神の存在と力によって、世の中で起こる事象を説明する。それに対し、「哲学(philosophy)」は、論理的・合理的に世の中の事象を説明しようとする。

ここにおける「論理」とか「合理」という文言の「理」という文字は、長い歴史で積み重ねられた、（皆が納得する）「事実とは何かという整合性のある説明」のことと考えてさしつかえない。むろんここで言う「皆」とは、本書の言うところのまともな

人々をさす。もう少しあみ碎いて表現するなら、「知の集積」とも表現できるだろう。「philosophy」の語源の「philo」は愛する、「sophy」は知（識）のことと、つまり哲学とは「知を愛する」学問と考えることができる。

現代では哲学と言えば、小賢しい理屈をこねくり回し、結論の出ない空論を戦わせるようなニュアンスで受け取る人が少なくない。しかしもともとは、数学や物理学、天文学などを含む、「世の成り立ち」や「あり方」を思弁する高尚な学問をさしていた。知を愛し求め続け、ある程度極めた人間を指して哲学者と呼んだ。人文・社会系大学院では、いまだに授与される学位（博士号）を Ph.D と呼ぶことが多いが、これは「哲学博士（Doctor of Philosophy）」の略号である。俗に「知の巨人」と称される博覧強記の人間を見ると、世の中のすべてに興味を持つタイプが多いが、ピュタゴラスやソクラテスの時代の哲学者とは、そういう人々を意味する言葉だったのだ。

アリストテレスが始祖とされる演繹的論理学は、特に過去の事実との無矛盾性と因果律を重視した。おぼろげながらも判明しつつあった種々の現象を前提として、もしそれが正しいなら、推論として導かれる結果や論理も正しいと考える方法論である。アリストテレスは、科学的方法論の第一歩をスタートさせ、発展させた哲学者であると言っても過言ではないだろう。

推論として導かれる結果や論理が、前提条件と相容れないものであったなら、もとに戻って前提条件から考え直さなければならない。ギリシア哲学と呼ばれる知の体系は、このような緻密な作業をいくつもの集団が競い合うように発展させてきた結果、大いに向上してきたのである。哲学者とは、あえて別の表現で言い表すとすれば、「科学的方法論を大切にし、守ってきた人間」であるとも言える。

そこに「すべては神がそう決めたから」という理屈を持ち出したのが神話（宗教）の体系である。キリスト教の教義が大前提として存在し、その部分は決して変えてはならない。世の中の現象は、教義と矛盾しないように説明しなさい、と命じられた時、ギリシア哲学が持っていた自由な発想と、競争による知の発展力、そして論争のルール（科学的方法論）は、大部分失われてしまったのである。

たとえば地球が何十億年もの歴史を経てきたことは、地層学、物理学、天文学、生物学、化学などの知の集積によって、「事実である」と断言できる。筆者は一応研究者として、「100 %」とか、「断言する」などという例外を許容しない用語はなるべく使わないよう気をつけているが、その筆者をもって断言できる。「地球は何十億年もの歴史を重ねてきた」、それは「100 % 確実」だと。

おびただ しい量の証拠があり、すべてに整合性のある理論で裏打ちされているのが、地殻変動、堆積物による地層形成、およびそこに残る化石、そしてそれらから演繹される（特殊な放射性物質の半減期による年代測定などによる）生物の進化である。そう、人間がもっと猿に近い生きものだった時代は、かつて実際に存在したのである。

むろんまだわかっていないこと、説明できないことは山ほどある。研究者の多くはそうした未知の問い合わせるべく、日夜研究にいそしむ。そこにおいては、過去に積み重ねられた多くの事実と理論の上に、何か新しいものをのせる努力が続けられているのである。

なお、ほぼ間違いないレベルの証明が可能な自然科学の分野間でも、証明の厳格さには微妙な差は存在する。生物、医学、化学などは比較的厳格性のレベルが高いとは言えないが、逆に最も厳格なのは数学の世界とされる。サイモン・シンによる『フェルマーの最終定理』（新潮文庫、2006）には、次のようにくだりがある。

数学の証明は、われわれがふだん口にする「証明」、あるいは物理学者や化学者の考える証明よりもはるかに強力かつ厳密だ。科学的証明と数学的証明とは、微妙に、しかし重大な点で異なっている。（中略）

数学の定理は、この論理的なプロセスの上に成り立っており、一度証明された定理は永遠に真である。数学における証明は絶対なのだ。（サイモン・シン、2006、56頁）時として、過去の（信じられてきた）事実が間違っていることに気づくこともある。しかしそれは、比較的マイナーな調整（サブ・パラダイム・シフトとも呼ばれる）にすぎず、大きな流れや、科学全体の事実追究の方法論自体はほとんど変わらない。算術計算において、 $2 + 2$  が 4 になることや、三角形の内角の和が（二次元平面上で）必ず 180 度になることが事実であるように、科学は自明の公理の上に確固たる体系を作り上げている。いくら「神なら内角の和を 200 度にできる」と主張しようと、間違っているものは間違っているのだ。

内角の和なら必ず 180 度であることを（しぶしぶ）認めたとしても物理法則なら——たとえば万有引力の法則なら——変えられるかもしれない、などと考える宗教もある。しかし数学上の公理レベルの事実が、大きな山の土台付近の石や岩だとすれば、万有引力の法則は 2 ~ 3 合目の石や岩にたとえうる。現在の頂上を形成する部分は崩れたり形を変えたりする可能性はあるが、中腹以下が大きく崩れることはまずない。実際の山なら噴火したり地層が変わったりすることもあるだろうが、この科学体系という強固な山は、全体として決して崩れない山だと考えてよいのである。

繰り返しになるがまとめておこう。科学とは、「論理的・合理的に世の中の事象を説明するための過去に認められた事実と理論の集積、およびそうした結論に達するための方法論（観察・データ・因果律・統計など）のこと」である。客観的な「知」の集積とも表現しうるものであり、実際に世の中の事象を最も的確に説明しうる（唯一と言つていいほど他の追随を許さない）論理体系なのである。

科学という巨大で強固な山が築かれるのを横目に、神による世の成り立ちや、行動規範を（偉そうに）説明していた宗教の権威者たちは、いくつかの選択を迫られる事になった。自分たちの教義と科学が示す証拠の数々とが矛盾を示し始めた時、宗教家たちには少なくとも「3つの選択肢」があった。

ひとつめは、「科学を否定し続ける」こと、つまり自分たちこそ正しいと主張し続けることである。それはある意味で険しい道でもあった。たとえばある集団内で、これまで病気を治すのは、神の意志や神の弟子にあたる人間（呪術師など）による、「（科学の見地からは）不思議な方法」であったとしよう。そんな時でも、自分たちが正しいとするグループは、現代医学より、自分たちの伝統を信用しなくてはならないからだ。医療に限らず、すべての科学的事実を否定する教義は、昨今ではあまり多くの人に受け入れられることはなく、長く続くこともない傾向を持つだろう。ペニシリンで治る病気が、摩訶不思議なまじないで治らないことなど、経験ですぐに判明するからである。

ふたつめは、科学を真実と受け止め、「聖典に書かれていることや、伝統的に信じられていたことの中には、誤りもあることを素直に認める」ことである。このように柔軟に新しい知見を取り入れることのできる教義は、比較的長く続く傾向にある。しかしその宗教の「根本に関わる教義と矛盾する事実」が、科学によって示されたらどうするのか。それが次の3つめの選択肢である。

3つめの選択肢は、「ある程度まで科学の成果を認め、場合によっては聖典の一部分が神話かおとぎ話にすぎなかったことを認める」。それでいて基本教義に関わる部分は、なんとか「科学と矛盾のない説明をつけよう」とする。そんな「解釈の変更」を選ぶ選択肢である。

進化の法則はもう否定のしようがないため、神が天地を創り、アダムとイブを作ったことや、ノアの大洪水は神話として考えましょう。ただし神（ヤハウェ）の存在やイエス・キリストが同じ神格の同一体のような存在（三位一体）であることは、決して疑ってはなりません、などと、一定の融合を目指す宗派がその例である。

3つの選択肢のひとつめ、つまり自分たちこそ正しいと主張し続けることは、科学がまだ低い山であった時代には、ある程度通用した。先ほど伝統に固執するだけの宗教は、昨今では長続きしないだろうと述べたが、ずっと以前には科学などまやかしだとする「力ワザ」が通用し、宗教の教義が科学の論理より優位にあった時代もあった。しかもその時代はけっこう長く続いていた。

科学を否定する効果的な方法のひとつは、「人々をして知識にアクセスさせない」ことである。幸いというか、識字率が高くない時代は長く続いた。肉体労働を中心とする社会では、識字能力はそれほど重要なものはみなされていなかったからである。字を読んだり書いたりするのは、一部の特權階級や、専門職業の人だけ必要だと考えられていたのである。イエス・キリストや、弟子のうちの何人が字を書けたかはわかつていながら、圧倒的に少数派だったはずだ。識字能力は、知にアクセスするための大きな手段であり、その点で識字率の低い社会においては、科学が何をどう言おうが、無視できる小さな波にすぎなかつたのである。その小さな波にアクセスできる人々は、しかし、比較的教養のある有力者であるケースが多かったため、潜在的脅威は小さくはなかった。そこで宗教家が実施した対抗策のひとつが、「禁書」指定や「焚書」と呼ばれる隠蔽工作である。

手元に 1806 年発行のカトリック教会による『禁書目録』がある。当時の教皇ピウス 7 世（在 1800–1823）によるものである。この目録自体は 1557 年から始まっているが、それ以前にも禁じられた書はいくらでもあった。

19 世紀初め頃は、すでにかなりの知の集積が存在していたが、ダーウィン（進化論）やヴェゲナー（大陸移動説）、ラザフォード（原子論）、ワトソンとクリック（遺伝子論）、AIN シュタイン（相対性理論）などは、まだ現れていなかった頃である。

禁書目録には、ケプラー、コペルニクス、ガリレオなどの（ある人々にとってけしからん）科学書以外に、ジャン・ジャック・ルソーやジョン・ロックなどによる社会思想書、そしてキリスト教の中でも一部の権力あるグループでありながら、意に添わない教義を主張する異端者——たとえばヤン・フスやマルチン・ルター——なども載っている。

カトリック教会にとって最も危険な人物とは、多くの大衆や全く別の宗教的ライバルよりもむしろ、比較的近い信条でありながら、相容れない主張をする知的な人々であったことは想像に難くない。手を出しにくい所にいたヤン・フスなどは、「決して悪いようにはしないから」と約束して、チェコ（ボヘミア地方）からコンスタンツの公

会議（1415年）に呼び出し、そのまま火炙りにしてしまった。ついでにその著書も全部処分した。ジョン・ロックにしても、「人々が社会と契約したものとみなす」という人権思想の基本を打ち出したことで、その著作は禁書に指定された。契約は「人と神との間でなされるもの」と決まっていたからである。図表のページに載ったガリレオ・ガリレイの項目は、アルファベットのGのページに示されている。ページはまだまだあり、禁書の数がどれほど多くあったかを端的に示している。

先ほど、「カトリック教会は、人々に知にアクセスをさせない施策を探った」と述べたが、実は「人々に聖書すら読ませないようにもしていた」と言ったら、何人かの読者は驚くだろうか。本當である。この禁書目録には「Bible（英語などいくつかの言語）」という項目も存在する。

16世紀の宗教改革は人々に聖書を読ませ、その教義に従うことを勧める運動であった。プロテstant系キリスト教会の始まりである。しかし旧来のカトリック教会は、自分たちこそ神の代理人であるとの権威を利用し、金儲けや種々の不正行為に手を染めていた。たとえば最後の審判を受ける時に、天国へ行ける可能性の高まる免罪符——現世での罪を許す許可証書——などを、とんでもない値で売り出していたのである。

ケン・フォレットが書いたクロニカル・フィクション、『火の柱』という小説がある。16世紀半ば頃のイングランドを舞台としたものだが、その中に次のようなくだりがある。

教会からすると、聖書は禁書のなかでも最も危険なものでしかなかった。フランス語やイングランド語に翻訳され、ある一節がどのようにプロテstantの教えの正しさを証明しているかを説明する註<sup>ちゅう</sup>がついていたら尚更だった。聖職者は、普通の人々は神の言葉を正しく解釈できないから導きが必要だと主張していた。プロテstantは、聖書は人々の目を開き、聖職者の過ちを教えてくれると主張していた。

（ケン・フォレット、2020、上、503頁）

キリスト教は啓典宗教——聖なる書の序列と範囲が決まっている宗教——であるはずにも拘らず、人々には聖書を読んでほしくないと言っていたことになる。たとえばイスラム教徒に、コーランを読むなと言うことが、どんな意味を持つかを考えてみてほしい。こうした旧カトリック系聖職者の勝手な解釈を正そう、と生まれたのがプロテstant運動の始まりである。

ところがヘンリー8世が、ある女性と（禁止された）離婚をしたいばかりに、プロ

テスタンントの中でも新解釈となる「英國國教会」ができる。のちにジェイムズ1世が、異端への締めつけを強化するのだが、それは旧勢力（カトリック）に対するものだけではなかった。ジャン・カルヴァンらの教えを守ってきたピューリタンたち（一応プロテスタンントの仲間）に対しても、英國國教と違うというだけの理由でかなり厳しい対応をした。それが17世紀に始まる、新大陸（アメリカ）への移民につながっているのである。

新大陸においても、聖職者たちは科学との対立に対し、当初は力ワザでの優位性を保持できた。それが崩れるひとつの切っ掛けは、ベンジャミン・フランクリンによる避雷針の発明である。アメリカ建国の父のひとりとして知られる、ベンジャミン・フランクリンが避雷針を発明し、建造物への設置を呼びかけた。それに応えた人々の建物には、なぜか雷による被害がほぼゼロとなったが、応えなかった建物は今までどおりに焼失することとなった。

「雷は神の怒りによる天罰」だと教えてきた教会は、なかなか避雷針を受け入れようとはしなかった。科学によって神の罰を逃れるなど、不届千万と考えたのだろうか。不幸なことに、教会は高く尖った建築物が多く、天候の悪い時に教会を信じて逃げ込んだ信者の多くが、落雷の被害に遭ってしまったのである。その後もいろいろな事象につき、科学の勝利が増え続けていった。

こうして宗教家たちのひとつの選択——科学を否定し続けること——は、徐々に不利な地位に移行していったのである。

イエス・キリストが磔刑で他界したのは、紀元30年もしくは33年のどちらかだといいうのが、研究者間の共通認識である。31年や32年でない理由は（詳しくは省くが）<sup>すがこし</sup>過越しの日（春分の日、そして新月などのタイミング）と曜日が合わない——聖書の何人かの記述と相容れない——ためである。筆者は33年（4月3日）説を信じている。

キリスト教教義に関する初期の神学論争は、2～4世紀に起こっている。その後コンスタンティヌス大帝による325年のニカイア宗教會議で一応の結論に至る。神がヤハウエ、イエス・キリスト、聖霊の三位一体であると決定されたのも、この会議においてである。むろん大帝による強い意志と、多数派による（背後の工作も含めた）ゴリ押しで決まったのであるが、この時異端とレッテルを貼られたアリウス派などは、「ヤハウエとイエス・キリストが同一神のはずがない」と主張していた。片や慈愛溢れるイエス、片や嫉妬深く、ワガママ、気まま、残酷なヤハウエとが、同一体などということはありえない。

後世の研究者の多くは、三位一体説には無理が多く、アリウス派の主張の方が一貫性があると認めている（たとえばロバート・R・カーギル、小室直樹など）。当時の神学論争は、ヘレニズム文化の影響もあって、論理的整合性を重視していた。つまり（あえて付言すれば）「科学的」であることを重視したため、あまりに荒唐無稽な議論は、許されるものではなかったのである。しかしコンスタンティヌス大帝の権威は並大抵ではなかった。自ら司会を務め、「神が一人より多く存在するという論は決して許さん」と睨みをきかしていたのである。

ここにおいて神学論争は、科学の基盤から離脱した。永々と築いてきた、ギリシア哲学以来の科学の伝統を、超自然的な呪術の世界に引き戻してしまったのである。幸い、（比較的）理路整然としていたアリウス派は、北や東に布教の地を得た。ゲルマン人やのちに東方教会の宗派の一部として長く残った理由は、その教義が柔軟性を持ち、少しあは科学的マインドを持っていましたからであろう。

こうして、科学を拒絶・否定することの多いカトリックから分かれた宗派は、アリウス派以外にもいくつかあり、それらは比較的柔軟性を持った宗教として、各地で変化しつつも生き伸びていった。のちに宗教改革の中心になるのは、ドイツ、オランダ、スイスなど、ゲルマン系の文化を受け継いだ国である。これはおそらく偶然ではないだろう。

出典：谷岡一郎『悪魔の証明——なかったことを「なかった」と説明できるか』（ちくま新書 2021年）

（出題にあたって、一部、原文（縦書き）・図を省略したり、年代・数字の表記を改めた箇所がある。）

設問I. なかったことを証明する要素として筆者が上げている「不可能性」「非合理性」「間接補強証拠・要因」について、500字以内でそれぞれ説明しなさい。  
(100点)

設問II. 「不可能性」の要素を考えるに当たって科学の説明が優先されるのはなぜか。  
また、宗教の教義と科学との矛盾について、宗教家たちがどのような態度をとってきたか、1500字以内で説明しなさい。(200点)